



Sex? Hapana, tume-chill 「非文字」の混合言語、シェン語のVサイン



小馬 徹 (神奈川県大学教授 / COE事業推進担当者)

はじめに エイズと戦う「非文字言語」

2001年10月、アフリカ最後の絶対君主、スワジランドのムスワティ3世が若者たちに完全な性的禁欲を命じて世界をアツと言わせた。違反者からは牛一頭分の罰金を取ると宣言したが、1月後に彼自身が9人目の妃(17歳)を得て捉破りを強いてしまう。婦人団体に矛盾を果敢に突かれると渋々罰金を支払った。「隗より始めよ」の伝!

ただ、ムスワティの命令は無理無体だが、徒な伊達・粋狂でも荒唐無稽の高踏でもない。今アフリカではパンデミックが若年層を根絶し兼ねない勢いで荒れ狂い、中でも彼の国は最悪の状況に陥って久しい。王は心底人々を思うものの、如何せん彼は人々の一人ではなく、王なのだ。裸に気づかぬ王様もいれば、纏った衣 掟 を忘れる王もよう。

一方、民主国家ケニアでは、取られるのは「罰金」の牛ではなくただ命だけだから、禁欲せよと人々が自ら晴朗に合唱している。新聞、雑誌、ラジオ、テレビなど、マスメディアの至る所で幾度となく反エイズ・禁欲キャンペーンに出食わさない日は一日もない。そのシンボルマークが、右側にchillの語を添えた独特のVサインである。

このchillは、「禁欲する」を意味するシェン語の(英語起源の)動詞だ。シェン語は、1990年代半ばにケニアの若者たちの間で急速に台頭した新たな(都市)混合言語で、ケニア憲法の規定ではいかなる範疇にも属さない、未公認の、いわば「存在しない」言語である[小馬 2005: 103]ところが、国家の浮沈を賭けた一大反エイズ・キャンペーンが、公用語の英語でも国家語のスワヒリ語でもなく、このまだ正書法もないストリート言語で繰り広げられている現象は、まさに現代の沸点として刮目に値する。

そこで、シェン語という「非文字言語」(正書法をもたない言語)の沸き立つばかりに旺盛な活力の秘密、即ち超文字的な論理をその独特のVサインを鍵として紹介し、少し立ち入って考察してみたい。

であるバントゥ語系のスワヒリ語を母体(donor)として英文法も盛んに援用し、語彙は両言語を中心にケニアの諸固有語(民族語)からも広く借用のうえ、語形や意味を独特の仕方に変形している[小馬 2004b, 2005]

さて、今回のキャンペーン(便宜的に「ku chill 計画」と呼ぼう)は、国際機関の援助を受けてケニア政府が開いているもので、新聞紙上では2004年10月に、テレビでは2005年1月に始められた。最初の新聞広告(図1・表紙)の意匠は、若者たちの群れの最前列にいる男女2人が片手と両手でVサインを示しているもので、最上辺には、

Sex? Hapana, tume-chill.、最下辺には、We don't follow the crowd. と、Ni poa ku chill. のキャッチコピー、ならびにシンボルとして「chill付きVサイン」が印刷されている。

とは純然たる英語とシェン語の文、はEng.-Sw.-Sw.-Shng. の内的構成をもつシェン語表現である。は、「セックス?まさか、僕らはクールになったのさ」、は「クールが素敵なんだ」と訳せよう。

2005年には、スクールバスから身を乗り出した男1人・女2人の中学生が各々片手でVサインを作っている意匠の新版(図2)が登場した。文字表記は、では否定詞がスワヒリ語から英語に、では文全体が、We won't be taken for a ride. に置き換えられている。"take 人 for a ride"は「人をたぶらかす」、より直接的には「人を車で連れ出して殺す」意味である。このポスターの意匠は、後者のニュアンスをスクールバスのイメージに重ね合わせた発想で、学校、ことに寄宿制の学校が性的放縦の温床になりがちな実情も仄めかして、巧みだ。

一方、テレビではニュース番組の前か途中に同じモチーフの動画を写す。まず色々な学校の生徒がエイズと禁欲に関する問い掛けを受ける場面があり、それから

の順番で音声流れるという趣向である。

1 クールが最高

シェン語は、東アフリカの混合共通語(lingua franca)

2 シェン語は若者のためならず

次に、「ku chill 計画」の言語媒体としてシェン語が

選ばれたのは、主要なターゲットが若年世代であり、シェン語が彼らの第一言語（first language：主にそれで思考する言語）だからだと仮定して、検討を加えてみよう。

同じ反エイズ・キャンペーンでも、無料のHIV感染血液検査と感染後のケアの普及を目的とするVCT（Voluntary Counseling and Testing Centres）が実施しているものは（便宜上「chanukeni計画」と呼ぼう）既婚者層を主な対象としている。ところが、そのポスター〔図3〕も、まさにシェン語の単語が鍵になっているのだ。

そのキャッチ・コピーは、左上から右下への順で、(a) Onyeshya Mapenzi Yako (Sw.: あなたの愛を示そう)、(b) "My husband knows I'm HIV positive and we're still together." (Eng.) (c) Chanukeni pamoja (Shng. + Sw.: [夫婦で]一緒に開明 [=受検]しよう) である。ここで特に強い印象を与える語がchanuka(本文

では、語尾のaに代えて二人称複数を示す-eniという接尾辞が付いた語形でchanukeni)である。これは純粋なシェン語の造語で、元々は伝統を脱して近代的な暮らしに移行すること(開明)を意味していたが、現在ではHIV検査を受けることが第一義になっていて、代替語のない打って付けの表現として重用されている。

同様の事情は、上の二つのキャンペーンが対象としている二つの世代の中間に位置する、大学生たちの団体が始めたキャンペーンにも見いだせる。

ナイロビ大学の学生たちの一部は、HIV/AIDSの蔓延を押し止めるべく世人を啓蒙することを目的として、2004年後半にICL(I Choose Life)グループを結成した。彼らは、国際援助団体であるUSAIDとFHI(Family Health International)の後援を得て、2005年4月初めに首都ナイロビのメイン・キャンパスで文化祭を催した。

図1



図2



「ku chill計画」の最新版ポスター（2005年3月末現在）図1のキャッチ・コピーの内、「We don't follow the crowd.」が「We won't be taken for a ride.」に置き換えられている。これは、学校が性的放縦の温床になりがちな実情も仄めかす、巧みな表現だと言える。

昨年ケニアで、新聞、テレビ、ラジオなどマスメディアを総動員して展開されている、反エイズ=禁欲キャンペーン（「ku chill計画」）ポスターの初版。左下隅に描かれた「chill付きVサイン」に注意。「非文字言語」であるシェン語の独特の論理と表現が窺える。（表紙写真）

図3



既婚者を主なターゲットとする「chanukeni計画」のポスター。「My husband knows I'm HIV positive and we're still together」という惹句が印象的だが、Chanukeni pamoja（[夫婦で]一緒に開明 [=受検]しよう）というシェン語表現が鍵になっている。



この催しの宣伝に用いられたポスター〔図4〕と、メンバーが着用したTシャツには Tia zii ni Kuzii というキャッチ・コピーが大書された。ziiは英語のZ、つまりzeeの借用、tia はスワヒリ語の動詞「入れる」、Tia ziiは全体で「断る」を意味するシェン語。一方、ni kuziiは、上記「ku chill 計画」のキャッチ・コピーの鍵となる ku chill に対応する表現で、「クールになる」、つまり「(性的に) 禁欲する」を意味している。このkuziiは、Tia ziiと韻を踏むように、同じく英語のZからICLグループが新たに造語したシェン語の動詞である。なおku-は、スワヒリ語、ならびにシェン語の不定詞。

以上から、少なくとも1980年代半ばまではストリート・チルドレンの言葉として卑しめられ、遠からず姿を消すと軽視されてきたシェン語が、今や少年から壮年(前期)までの世代で、しかも大学生などのエリートの間でも、広く第一言語化している事情が窺えるであろう。

3 「chill付きVサイン」の論理

ところで、「ku chill 計画」のシンボル・マークの「chill 付きVサイン」は何を意味するのだろうか。

まず、その記号的側面を読み解こう。正書法のないシェン語は大きな自由度をもって文字化される。例えば、ケニア最大の携帯電話通信会社サファリコムが今展開中の拡販キャンペーン(eQUESTING)の宣伝ポスター〔図5〕が、実情の一端を教えてくれる。キャッチ・コピーのIAM

eQUESTING, RU? の中で、「RU?」は Are you? を代用している。これは、米語のメールの略語でしばしば D8 が date を意味するのによく似た事情だと言える。

ケニアでも、CUL8er(See you later.) UR 2 sweet 2 B 4go10. (You are too sweet to be forgotten.) OP U R OK(I hope you are O.K.) W8(wait; weight) H8 (height) N (and) 2moro (tomorrow) 2 D (today) などが、メールで頻用されている。ただしこれは、つい最近の携帯電話の急速な普及以前から既に見られた現象だ。それらの略語を、中学生や高校生たちが、教師に隠れて授業中に短かい手紙やメモを回すための隠語的な符丁として用いていたのである。

ここで注目して欲しいのは、2が不定詞 "to"、あるいは副詞 "too" の代用となる符号であることだ。「ku chill 計画」のシンボル・マークである「chill付きVサイン」におけるVサインの表層の記号的な意図も、伸ばした二本の指で2(two)を表示して、それで英語の不定詞 "to" を代用することである。さらに、シェン語の統語法の大きな特徴は、既にお分りの通り、英語とスワヒリ語の自在なコード変換(code-switching)にある。したがって、英語の不定詞 "to" は即座にスワヒリ語の不定詞 "ku" に置き代わり得る。すると、「chill付きVサイン」、つまり「to chill」と等価である「Vサイン(=2)+chill」は、結局「ku chill」を表しているのだ。

ただし、これだけでは「chill付きVサイン」の意味を汲

図4



ナイロビ大学の学生グループICL (I Choose Life)がUSAIDとFHIの援助で開いた、「反エイズ=禁欲」文化祭のポスター。「tia zii」というシェン語の慣用句と韻を踏むように「ku-zii」という語が新たに創られた。ziiは、英語のZ(zee)からの借用語。

固定式有線電話が普及しなかったケニアの田舎でも、携帯電話は若者の心を即驚掴みにした。最大手の通信サービス会社サファリコムの拡販キャンペーン用ポスター(=パンフレット)裏面でもシェン語を多用。電波の自由化と相携えて、シェン語が全国の若者を単一の文化集団に誘った。

図5



み尽くせず、象徴表現の側面も顧ておく必要がある。

4 Vサインの伝統と遺産

シェン語が1990年代半ばからメディア媒体として急激に台頭した背景には、ケニアにおける政治の自由化、ならびにそれに連動する電波(ことにFM波)の自由化の戦いがあった。独立以来続いたKANU(ケニア・アフリカ人連合)の独裁体制を複数政党制に改めようとするFORD(Forum of Reinstallation of Democracy)の政治運動が、1989年から1990年代初めに盛んだった。実は、Vサイン(より正確には、二本指の腹を相手に向ける示威サイン)がその象徴として用いられたのである。

1990年から1991年末、この運動は一層大きな盛り上がりを見せる。1990年7月7日に、ナイロビ下町の一角カムクンジの露店群が警察の急襲を受けて破壊され、抗議した小商人たちが数人射殺される事件が起きた。これを知って人々が市内数カ所で決起して警察と政府に反撃を加えると、混乱に乗じた略奪も起きて暴動状態に陥った(サバサバ蜂起)。翌年の7月7日にも同様の騒ぎが起きる。これを受けて、先進工業諸国が援助の前提条件として複数政党制導入の決断を一致して迫った結果、1991年末にケニア憲法が改正され、ついに一党制に終止符が打たれた。

FORD運動では、Vサインの突き出した二本指は一ではないこと、つまり複数(政党)を象徴していた。このFORD運動を成功に導く前段階として、徐々にではあれ、新聞・雑誌から電波放送へと波及した報道の自由の拡大があった。それゆえに、「chill付きVサイン」には、FORD運動の精神の継承、つまり社会の自由と健全性を守る誇りと気概が籠められているのだと言われる。

5 炸裂するシェン語の勢い

1990年代半ば以来のシェン語の勃興を決定的にしたのが、2004年11月末のY-FM局開局だった。この局はそれまでの地域性の強いFM局とは桁違いに強力な電波を発信して、ケニア国境を超えたウガンダ東部やタンザニア北部での受信も可能にした。しかも、若者世代にターゲットを絞って、ニュース、討論、解説などの番組やCMをシェン語で放送したのである。

Y-FMのYが何の頭文字なのか、局は明らかにしていない。ただ、人々はyouthの頭文字だと信じている。いずれにせよ、その成功を目の当たりにした他局は、間もなく同じ営業政策を打ち出して追随したのだった。

さらに、ケニアの二大新聞社、ネーションとスタンダー

ドが、2005年初めにシェン語の惹句を用いて乗用車などの豪華な商品を抽選で貰える拡販競争を始めた。これもまた、重要な変化の兆候である。前者はMaisha ni poa(人生は素敵だ)後者はOne thao(一千シリング〔が二週間ごとに百人に当たる])と銘打っている。

そうでなくとも、既にナイロビの街の到る所にシェン語の惹句が溢れている。交差点には、Palipo na kraudi mob, kuna firestone(Sw.-Sw.-Shng.-Shng.,SW.-Eng.: Where is a big crowd, there is Firestone)という大看板が掲げられ、弱小スーパーであるUkwalaの買い物袋にも、"BOB for bob, utanunua MOB"(Sw.-Eng.-Sw.,Sw.-Shng.; ちょっとづつ〔お得〕、買えるよもっと)と上手に韻を踏んだ惹句が刷られているという風に。

おわりに シェン語とケニア国家の未来

政府は、若者の心を鷲掴みにする表現手段としてシェン語を反エイズ・キャンペーンの言語に選んだ。それは、世の親たちが眉を顰めるのを尻目にあえて性的問題を庶民の茶の間に持ち込んだのと同様に、国家の将来を深く憂慮した政府の、止むに止まれぬ英断だっただろう。

親たちのもう一つの苦衷は、連日連夜FMやテレビで放送され、新聞の大紙面にも登場するこのキャンペーンのシェン語が、全国隅々のもっと幼い児童たちの間にも確実に浸透し始めていることにある。

もはや、シェン語の成長発展と普及が後退することはあり得ないだろう。親たちの語学教育上の心配とは裏腹に、このストリートのスワヒリ語、あるいは混合語は、旧世代には宿命的なものに見えた民族アイデンティティの深刻な対立を超えて、ケニア国民としてのアイデンティティを若い世代の間に確実に形成しつつある。

あるいはこれこそが、莫大な数のエイズの犠牲者と引き換えにケニアが今手にしようとしている、かつては夢想だにできなかった、誠に大きな幸運なのかも知れない。

《参考文献》 小馬 徹

- 2004a 「maが差した話 スワヒリ語のレッスン」、『言語』33(8):4-5。
- 2004b 「ケニアの勃興する都市混合言語、シェン語 仲間言葉から国民的アイデンティティ・マーカへ」、『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』(神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議)2:125-135。
- 2005 「グローバル化の中のシェン語 ストリート・スワヒリ語とケニアの国民統合」、梶茂樹・石井漣(編)『アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)87-111頁。